

Richard Dellamora: *Friendship's Bonds:  
Democracy and the Novel  
in Victorian England*  
Philadelphia: University of Pennsylvania  
Press, 2004. 252 pp.

---

角田信恵

---

できるだけ最近の研究書を取りあげるようにとの本誌事務局からの依頼もかわらず、2004年出版の本書を取りあげることにした経緯には、釈明が必要だろう。まず、ジャック・デリダが1994年に『友愛のポリティックス』を出版した（その日本語版は2003年に出版された）。それを受けて、アラン・ブレイの *The Friend* (Chicago and London: Univ. of Chicago) が2003年、著者の死後に出版された。それは友愛の倫理的伝統の起源をキリスト教に求め、埋もれていた精神史の一脈に光をあてると同時に、男たちの絆の背後にもっぱらセクシュアリティを読み取ってきた従来の方角をシフトさせ、それを友愛というエトスとして捉えなおそうとする壮大な企てであった。デラモラによる本書はその衣鉢を継ぐもので、本書は「学者であり友愛の妙手であったアラン・ブレイの思い出に」捧げられている。デリダやブレイの友愛というエトスを軸にヴィクトリア朝の文学テキストの政治性を鮮やかに読み解いてみせる本書は、おそらく英文学研究に新たな地平を切り開くものであった。実際、2006年には Leela Gandhi が *Affective Communities: Anticolonial Thought, Fin-de-siècle Radicalism, and the Politics of Friendship* (Duke UP) において友愛に帝国主義解体の契機を見出してい

るし、2007年にはシェイクスピアの時代を扱う Thomas Macfaul 編 *Male Friendship in Shakespeare and His Contemporaries* (Cambridge UP), 16世紀から18世紀までを扱う Katherine O'Donnell 他編 *Love, Sex, Intimacy and Friendship Between Men, 1550-1800* (Palgrave Macmillan), ヴィクトリア朝を扱う Carolyn W. De La L. Oulton の *Romantic Friendship in Victorian Literature* (Ashgate), 20世紀初頭を扱う Sarah Cole の *Modernism, Male Friendship, and the First World War* (Cambridge UP) など、ざっとみただけでも、友愛をキータームにする英文学研究が続出しているのである。デラモラによる本書は日本ではほとんど注目されていないようだ。しかし、*Masculine Desire: The Sexual Politics of Victorian Aestheticism* (North Carolina, 1990) で文学におけるジェンダー批評、クイア批評の先陣をきったデラモラは、このところ行き詰った感のあったそうした批評の動向に、確かに新しい風を吹き込んだのである。

「個人的なことは政治的なこと」というのは、かつてのフェミニズム運動のひとつのスローガンであった。デラモラの試みの前提も、同じ言葉でまとめることができる。彼はヴィクトリア朝における国民国家の再組織化にあたっては、「正しい社会とは〔血縁ではなく〕友愛によって支配される社会である」とする古代の理念が支配していたとする。しかし、ヴィクトリア朝の人々は、友愛を基盤とする市民社会という理念がきわめて剣呑なものでもあることを意識してもいた。そもそも誰を市民とするかについて、すなわちどの範囲にまで選挙権を与えるかについての長い論争もあったし、友愛はソドミーに堕しかねない。男性の身体が国体のメタファーとして機能しうる時代であり、友愛という個人的なエトスが現実の政治に直結する時代だったのである。

むろん、誰を市民とするかという問題は、逆に言えば誰を市民としないかという問題になる。むろん、女は問題外だ。だが、男であっても、選挙権を得られない大多数の労働者は市民ではない。市民でないのは彼らだけではない。デラモラは西欧の国民国家はソドムの挿話を参照枠として形成されたとする。ヴィクトリア朝の『聖書』の注釈によれば、ソドムの住人が犯した罪には3種類の罪があって、それらは不信心の罪、博愛に反する罪、自然に背く罪であった。19世紀初頭のイギリスにおいては、英国国教会の信者でなければ市民権

が得られなかったから、ユダヤ教を固持するユダヤ人は不信心の罪を犯しているし、彼らの多くは金融業に携わっていたがゆえに、博愛に反する罪を犯している。さらに市民権をもたない男は男でない男であって、自然に背く罪（ソドミー）とも容易に結びつけうる。こうして、ユダヤ人自身がソドムの住人の罪深さと結びつけられ、選民たちの国民国家たる英国の「内なる他者」とされる。同様に、カトリックを信じるアイルランド人もソドムの輩だ。労働者階級の者もユダヤ人もカトリックも19世紀を通して次第に市民権を獲得していきはする。けれども、国民国家の市民といえども、いつなんどき自分が他者に転化しないとも限らない。友愛はソドミーと隣接しているからだ。

こうした前提にたつて、本書はヴィクトリア朝の数人の作家のテキストを読み解いていく。本書の構成は凝っている。全体のテーマを象徴するものとして、ジョン・シンガー・サージェントによる『ヨナタンとダビデの別れ』という印象的な絵が目次より前に置かれ、その絵と本書のテーマとの関連を述べる短い文章がその見開きのページに置かれる。ついで目次と序があって、つづくディケンズの『オリヴァー・ツイスト』（1837-9）とディズレイリの『アルロイ』（1833）と『タンクレッド』（1847）を論じる3つの章のあとには、「余談」としてカール・マルクスの「ユダヤ人問題について」（1844）が俎上にあげられる。つづく4章ではウィリアム・グラッドストーンの「ブルガリアの恐怖と東方問題」（1876）とトロロープの『首相』（1876）が、5章ではジョージ・エリオットの『ダニエル・デロンダ』（1876）が、6章ではヘンリー・ジェームズの『トラジック・ミュージック』（1890）が論じられる。最後をしめるのは「コーダ」で、そこではワイルドの『理想の夫』（1894）が論じられる。おそらく読者はヴィクトリア朝における国民国家形成にあたっての友愛という理念をめぐる不安のドラマを、一篇のオペラでもあるかのように鑑賞すべくしむけられているのだろう（サージェントの絵とその解説はいわば開幕の前に鑑賞者がながめるパンフレットだ）。ちなみに、デラモラはオペラについての研究書も出している。実際、本書は知的なオペラだ。本書で扱われる作家のなかで、ディズレイリとの関連でとりあげられるベックフォードとワイルド以外は、同性との性的な関係があったとはされていない。そうした作家のテキストにソドミーの暗

示を読み解き、その読みを時代の政策や国体の問題に転化させる。デラモラのスリリングな読みは読者に知的興奮を味わわせる。そしてほぼ時代順に並べられた各論を通読することで、読者はヴィクトリア朝における市民社会形成に向けての苦闘を概観すべくしむけられているのである。

たとえば、『オリヴァー・ツイスト』論をみてみよう。そこでデラモラはクルークシャンクの「オリヴァー、もっとと要求する」と題された、オリヴァーが粥のお代わりを要求する場面の挿絵に男性間のフェラチオを読み取る。この性的イメージはフェイギンとの関係でも繰り返される。それはアテネでは市民の形成に寄与するとされていた年長の保護者と年若い被保護者という関係のパロディーであると同時に、この小説にみられる子供の性的虐待を暗示するものでもある。さらにオリヴァーの「もっと」にみられる性的イメージは、オリヴァーが生まれ育った労働者階級の「もっと」という要求と、すなわち参政権運動と関連づけられる。むろん、テキストが語ろうとするのは、無垢なオリヴァーが中産階級の市民としての正当な位置を得るにいたる物語だ。だが、こうしたイメージからすれば、オリヴァーの身体は年長の保護者によって、そして労働者階級という出自によって、すでに汚染されている。汚染されたオリヴァーの身体は、汚染された国体のアレゴリーだ。だから、彼が最後に得たブラウンローという保護者もまた、独身だ。テキストはオリヴァーの市民としての自己形成をきわめて空疎なものにしているのである。デラモラはさらにこのテキストがディケンズがはじめて小説というかたちで出すことができたテキストであることに注目し、階級のはしごを昇るオリヴァーはディケンズ自身であったとして、ディケンズの男性性もまたきわめて危ういものでしかありえなかったことを示唆するのである。

だが、本書の全体を貫くモチーフは、国民国家の中枢に位置づけられる友愛という理念が、その裏面をなすソドミーをユダヤ人とひそかに結びつけてたえず排除していく、そのプロセスをたどることだろう。むろんオリヴァーを汚染させたフェイギンも、ユダヤ人であった。だが、そうした意味で本書の核となるのは、おそらくディズレイリの『アルロイ』を扱う第2章だろう（実際、本書の謝辞からすれば、この章だけがすでに別の書物に発表した論文の書き直し

だ)。デラモラがここで注目するのは、中東の抑圧されたユダヤ人を率いた伝説的英雄、アルロイの成長の過程だ。デラモラは、アルロイの成長をめぐるプロットが、さまざまな政治的宗教的スタンスをとる年長の保護者たちとの関係で語られていることに注目する。むろんオリヴァーの場合と同じく、これらの保護者たちとの関係は、同性間の欲望を内包してもいる。だから、ディズレイリはアルロイにこれらの保護者たちの政治的宗教的スタンスを乗り越えさせることでソドミーの危険を回避させ、自らのユダヤ人としてのアイデンティティを確立させるのである。デラモラはこうした物語は当時のディズレイリが必要とした物語であったとする。当時、ユダヤ教の信者が議席をもつことのできなかったイングランドで、ディズレイリは政界にのりだそうとしていた（それが可能であったのは、彼を政治家にしようと考えていた父親が、彼を英国国教会に改宗させていたからである）。反ユダヤ主義が席捲していた当時の英国で、ユダヤ人であることと国民国家の市民としてのアイデンティティを融和させんとするディズレイリの苦闘を、デラモラは『アルロイ』に読みといてみせているのである。

本書はジェンダー批評やクイア批評をクローゼットから解き放つひとつの方向性を示してくれる。むろん、本書がとりあげる個々の作品の読みに関しては、一面的だという批判もできるだろう。しかし、たとえばグラッドストーンのいう「ブルガリアの恐怖」にはソドミーへの恐怖が含意されていたといった（考えてみれば、ブルガリアはそもそも buggery の語源だ）、興味深い指摘が随所にみられるし、何よりも賞賛に値するのは、同性間の欲望を国体の中枢に位置づけてみせようとする、その骨太な姿勢だろう。ジェンダー批評やクイア批評を経ずしては、文学や思想のみならず、政治も十全には解き明かせない、本書はそんな批評風土の地ならしをしてくれた。だが、なににも増して、本書はさまざまなヒントを与えてくれる楽しい本なのである。